

八　わ　が　歩　み

統計学と私

私はもと数学解析という抽象的な数学を専攻し、そして、東京大学数学科を卒業してから五年間、大阪大学助手や講師をしながら、数学研究の道を歩んできた。その私が、九州大学に来てから統計学の方へだんだん深入りしていったことは、どういふ動機なり由来があつたのか、むかし、よくそういう質問をうけた。日本の数学界を代表する著名な数学者のいく人のかたがたとは、同じ下宿にいて寢食を共にした仲であるが、この友人たちも昔の私しか知らないようである。

他方、同じ九州大学数学教室で統計学を専攻している若い同僚や学生たちは、私が昔、一般調和解析や積分方程式を専攻していて、二十年前には統計の何をも解しなかつたといへば、ビックリするようである。それは別人の仕事かと思うようである。

しかし、本人にしてみれば、ある程度の一貫した連続性があるように思う。良きにしろ、あしきにしろ、ともかく自分の好むところに従ってゆき、恩師、先輩の歩まれた道にも、あまりしぼられずに進んできた結果がこうなったともいえる。

私は、幼少のころ、地理、歴史というような記述的な学科がたいへん好きであった。一方、数学のような論理的な思维の学問も得手な子供であったから、妙なコンビネーションである。仙台の第二高等学校のころには、人生の朝ぼらけというのか、一、二年のころまでは、やたらに哲学の本を讀みかじり、数学も理学もさほど魅力はなかった。自分の最終の目的は、哲学体系をうち立てるところにある、そのためには、数学と自然科学との勉強から始めるのであると、真面目に考えていたのだから、私など若い時は夢のなかに生きていたようなものである。

数学を専攻するようになってからは、ともかくこれで飯が食えるようにならなければならぬという職業意識もあったろうし、壮麗、透徹の数学の世界は、研究者をひきずりこむような美の世界であったから、脇目もふらずに数学に苦勞することが、この上もなく幸福でもあったのである。その時代が、二十代の十年ほど続いていた。ことに大阪大学数学教室は、当時、全国に冠たる純粹数学研究のメッカであった。いい意味で相互に競争心もあって、若いものが負けず劣らず、数多くの論文を書いたものである。しかし、このようなときにも私自身にはいつもただ純粹数学だけの世界に安住しえないものがあつたと見え、物理学の講義には東大の学生のときのように、阪大助手のとき

もよく聴講した。純粹数学の基礎にあるものを、ハッキリとり出し、これとの関連をとらえて、数学発展の基盤をあきらかにしなければならぬと、若輩のくせに問題にしていた。

私は、当時、関数方程式論を特に勉強していたが、それは、東北大学の伝統のフーリエ解析と東京大学の微分方程式論とが、一つの結合点になっているようなブランチである。だから、サイバネティクスでいま有名なN・ウィーナー教授の著書、論文はいつでも離さずもって歩いた座右の書であった。このウィーナーの研究の奥にあるものは、現今の言葉でいえば、確率過程論というものである。だから関数方程式論に深入りしつづつあった私は、次第に確率論に関心をもたなければならなくなってきた。数学解析学の道具を用意して、近代確率論を本格的に勉強しようという気になったのは、大学を出てから、もう三年余もたつてからである。それは、当時としては新しい数学像であった。代数学や幾何学の取扱う世界とはもちろんちがう。しかし、古典力学をバックにもつ微分方程式の世界像ともちがう。量子力学や統計力学の世界像には、これだけでは不十分であつて、確率論の世界という模型を用意する必要があつた。数学のなかでも測度論、近代解析の範疇（はんちゆう）に入るものを理解するには、やはり確率概念が、どこかに介在しているように思われる。

私がここで止っていたならば、依然として数学の世界にいたことになつたであらう。しかし、私の関心は確率論の基底にあるもの、すなわち統計学というものに進んでゆかないと、安心できなかった。当時、すでに数冊発刊されていた米国の専門雑誌アンナルス・オブ・マテマティカル・スタ

ティックスをあるとき開いてみたが、何をやっているのかサッパリわからない。有名な、英国のバ
イオメトリカにある論文だつてんでわからない。日本の数学界にこんな大きな欠陥をのこしてお
いてはたいへんである。いったい、それは何をやっているのか、ひとつ当たつてみておこうではな
いか。今から考えると、そんな気持もあつたらうと思う。

昭和十四年、九州大学に来てからは、農学部などの図書室で、独学を楽しんだものである。勉強
すればするほど、日本の数理統計学はたいへんに遅れている。精密標本論もまだ紹介されていない
し、分散分析法も実験計画法も知らなくて平気である。数学教室でも一度も習ったことはないし、
経済学部の統計学の講義にも教えられていないらしい。こんな状態をながく続けてはたいへん
である。数理統計学の導入及び発展を中心課題として、全国各方面の科学者、統計実家の団体を
つくる必要があることが痛感されたのである。このようにして、統計学研究の方へ自分の関心が移
つていった。方法論的な接続と、もう一つは、いわば漠然たる予感が私をひきずつた。私はR・
A・フィッシャー教授の思想の摂取に独学でとりかかったのである。

それからもう十七、八年になる。この間に、統計学は大きな成長をとげた。私は発展速度の大き
い、そうして多面的なこの学問の進歩に、ときには捕捉しがたい広さを感じ、自分の力量のたりな
いことをただなげかわしく思う。その基礎論についても、はげしい論争がいつも底流し、なまやき
しい思索では真相をつかみえない。せまく浅い体験では実態をつかみえない。実際面への応用がき

わだっぺいちじるしく、ときにきわめて有効適切であるこの学問は、ときとして、實際家の役に立つ道具の役だけに終始し、万人に奉仕すべき科学者の範疇外の仕事におわれる危険をもつ。いっぽうにおいて、理論的な研究の深さが要求されると共に、他方において、實際的な仕事の体験がとりわけ要請される。前者についていえば、サイバネティクス、数理計画法にみられるように、数理の高度化は不可避であろうし、後者についていえば、実査にも、分析にも、具体的な研究体験をできるだけ積むことが、統計学者としてはぜひ必要である。自分自身を顧みるとき、教授などという地位に安住するのもおこがましく、もっと一意専心勉強する余暇がほしくてたまらないのである。自分の力はしかし限られている。統計科学の一翼としてのサイバネティクスだけでも、これからの一生をささげてもなおたりないことである。

私が漠然としてしか予感できなかったものは何であろうか。現代社会の科学的・技術的な基盤、そういうものを今となってははっきり自覚して進むべきであると思っている。

わが歩み

(一)

わたくしは明治四十二年十月、小樽に生まれ、中学四年修了までずっと、そこで育った道産子で